



ものをはこぶ、海の安全を守ったり、さまざまな役割を持つ船。1896年（明治29年）に創業し130年の歴史を持つ函館市の「函館どつく」は、巨大な貨物船を作るほか、自衛隊の船やフェリーなどの修理も手がけています。道南のこども記者2人が造船所を訪れ、船がどうやってできるのか取材しました。（文・徳田莉万、写真・金田淳）

船造り 500人以上が力合わせ

こども記者見ぶん録

函館どつく 部品4万点、8カ月かけて



函館どつくの従業員数は4月1日時点で601人。造船所は広さ約28万平方メートルで五稜郭公園がすっぽり入りま

①完成間際の貨物船の前で、函館どつくの三上さん（左）から説明を受ける三関智也さん（中央）と祐川真央さん
②貨物船の操縦部屋で、船を動かすためのさまざまな設備について学ぶ、こども記者たち

す。新しい船を年5・5センチ造る道内最大で最古の造船所で、室蘭市内には船を修理し橋などを造る製作所もあります。こども記者は函館市・日吉が丘小6年の祐川真央さんと、渡島管内八雲町・八雲小5年の三関智也さん。函館湾に面し、



2人がまず目をうばわれたのは、海水をぬいたり入れたりして船を出し入れし、修理する巨大なプール「乾ドック」です。ここには三つあり、大きいもので深さ11メートル、長さ329メートル、幅58メートル。最も古い「1号ドック」は1903年（明治36年）から



使っているそうです。ドックにはこの日、色をぬり直しているフェリーや、安全に動かすための定期検査をしている自衛隊の船が並んでいました。会社を案内してくれたのは造船部長の三上翔太さん（44）と艦船修繕部長の松村英典さん（47）です。三上さんは貨物船1

点を組むまでに「3万〜4万点の部品を組み立て、完成まで約8カ月かかります」と説明。特に大事なものは鉄板を溶接してつなげたり、ガスバーナーであぶって曲げたりする作業で「10年くらいやって一人前」と言われるそうです。

「修理した船を取引先にもどすまでは期間が決められていて、必ず守らなければならないことです」と答えました。三関さんは「船の完成まで何人が関わっていますか」と質問。三上さんは「鉄板を切る

ところから始まり、板を溶接して大きなパーツにしたり、ペンキをぬったりするなど大体500人以上と教えてくれました。仕事のやりがいも聞きました。松村さんは「修理が終わる、無事に引きわたせた時の達成感」、三上さんは「台風や雪などでも思うように仕事ができない場合もある。それを乗り越えて出来上がった時は感動します」と目をかがやかせました。

函館どつくによると、日本が外国と輸出入する貨物の99%が船で運ばれます。祐川さんは「船は私たちの生活に欠かせないと分かった」と函館どつくが果たす役割の大きさを実感。三関さんは「働く人同士で仕事のバトンをつなぎ、チームワークを大事にしていると学べた。みんなで協力する姿はカッコいい」と、あこがれのまなざしを送っていました。

まなぶんデジタルには、さらに多くの写真があります。8月28日夕方から見られます。